

実施できていない人がセミナー後にセミナー前より増え、

3カ月後には全く実施できていないと答えた人が増えていた。この傾向は、医療職と福祉職に共通していた。これはセミナーによって、End of Life Careが、理解、実施できていないという自己認識が深まり、学習の意欲が高まり、自主学习が進んだが、現場で活用できるところに至っていないということが伺え、本セミナーのカリキュラムでは、参加者を自己認識には導くが、その後の実践までは至らせることができないと思われた。今後、End of Life Careに関してのカリキュラムの充実、再考が必要と思われた。

退院調整会議とケア担当者会議及びケアプランの作成は一連のものである。退院調整会議とケア担当者会議を通して、具体的に多職種連携の場を作り、それをケアプランとして形にしていく。これらの会議をどう作るかが、そしてケアプランをどう作るかが、多職種連携をどう作るかに直接つながる。アンケート調査を通して、会議に関しても、ケアプランに関しても、セミナー前後で理解していると答えた人が減ったことから、セミナーによって、参加者が「わかっていたかと思っていたが、実はわかっていたか」という自己認識が深まったと思われる。そして、3カ月後には、理解している人は増えたが、実施していると感じる人は減っているため、セミナー後に現在の多職種連携がされていない現場の中で、自分がそれらの会議やケアプラン作成を十分にできていないことが認識されているのだと思われた。しかし、福祉職は、3カ月経過して、更に会議の実施やケアプランの実施ができていると答えた人が増えているので、福祉職の現場の方が、それらの実践につながり易いのではないかと考えられた。いずれにしても、セミナーの教育効果は高く、その効

果は、現場での多職種連携を作る行動変容に繋がっていると考えられた。

■ケアプラン作成のワークショップに関して

本多職種セミナーの2日目の最後のプログラム、濃厚な医療ケアの必要な子どもの在宅支援のケアプラン作成のワークショップは、本セミナーの着地点とも言えるものであった。参加者は、そこまで学んだ子どもの病態、制度などの知識を活用し、多職種協働で、家族と子どもの生活を支えるプランを作成する。そのためには、生活の中で、医療ケアを行うということの具体的なイメージを描くことが必要になる。生活が排除され、医療のみが行われる病院と異なり、生活が営まれている家庭で医療ケアを行うことがどういうことか、多くの医療者には想像することが難しい。主介護者になることの多い母親は、注入、吸引の合間に、家族の食事を作り、洗濯をし、兄弟の面倒をみて、保育園の送り迎えもしなければならない。ミルクや、経管栄養剤が、栄養科などで、計量されて用意される病院と異なり、母親は自らミルクや経管栄養剤の用意をし、容器も使い捨てではなく、洗って乾かす作業が必要になる。これが医療者には、なかなか認識できない。逆に生活に寄り添うことに慣れている福祉職は、医療ケアについて理解したり、想像したりすることが困難になる。これらを具体的にイメージし、主介護者にどれだけ負担がかかるのかを実感することで初めてケアプランは家族の生活を支えるものになる。

今回のワークショップでは、24時間の生活をイメージするという点が不十分だったと考えている。今後、ワークを24時間をイメージするものと、ケアプランを作成するものの2つに分けて行うことも検討したい。

E. 結論

小児在宅医療支援の人材育成のために、多職

種セミナーを開催した。そのセミナーは、①小児在宅支援の対象となる子どもの病態を、生活の中のケアやコーディネートの観点から捉え直して医療職、福祉職共通の基盤を作り、②在宅支援に必要な医療と福祉の制度を学び、それを活用して、③多職種協働を実際のグループワークを通して体験的に学ぶ、という構造のものであった。その結果、医師、看護師、リハビリセラピスト、福祉職ともに98%が大変有意義、あるいは有意義であると評価した。また、そのセミナーで得られた学びは、参加者の自己認識を深めるとともに、継続性があり、セミナー終了後も参加者に影響を与え、その行動変容を起こしていることが伺えた。

今後、このような多職種合同セミナーを開催することは、小児在宅医療における人材育成の面で非常に有用であると考えられた。

F. 関連した業績

【書籍】

『今日の小児治療指針』（株）医学書院 2011年 東京 P103-104

『小児リハビリテーションポケットマニュアル』（株）診断と治療社 2011年 東京 P333-334

『NICU から始める退院調整&在宅ケアガイドブック』（株）メディカ出版 2013年 大阪 P8-12、223-225、231-236、277-279

『実践!!小児在宅医療ナビ』（株）南山堂 2013年 東京 P3-10、17-23

【雑誌】

「訪問看護と介護」17巻3号 2012年 P198-204

「小児保健研究」71巻2号 2012年 P158-161

「小児外科」44巻2号 2012年 P160-163

「障害者問題研究」2012年8月号 2012年 P82-89

図1 在宅の医療依存度の高い重症心身障がい児者を支援するためのモデル

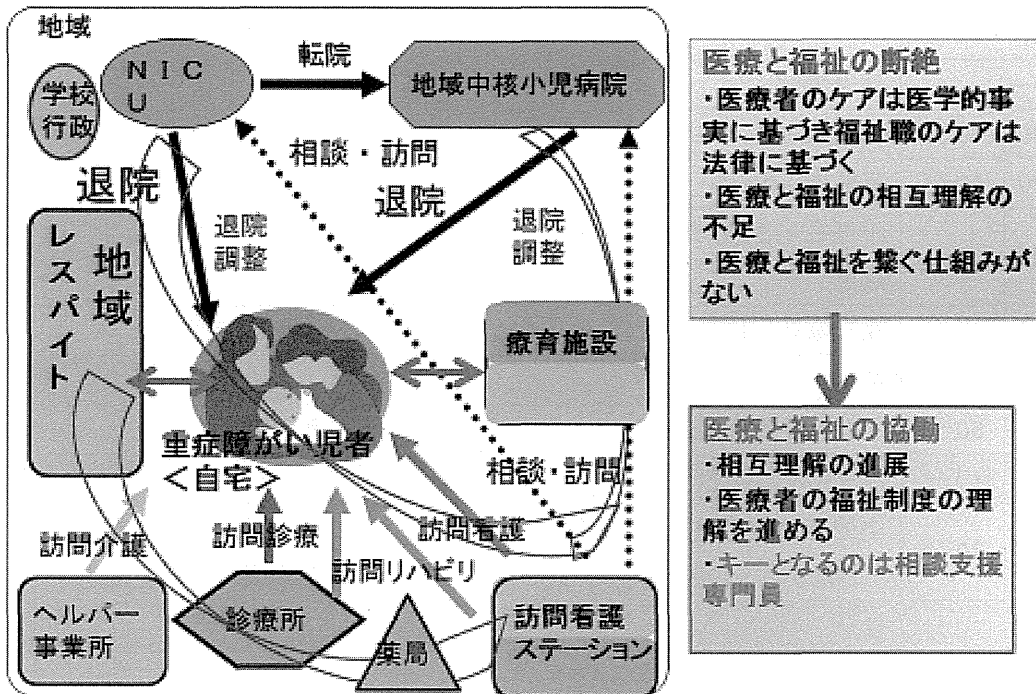


図2

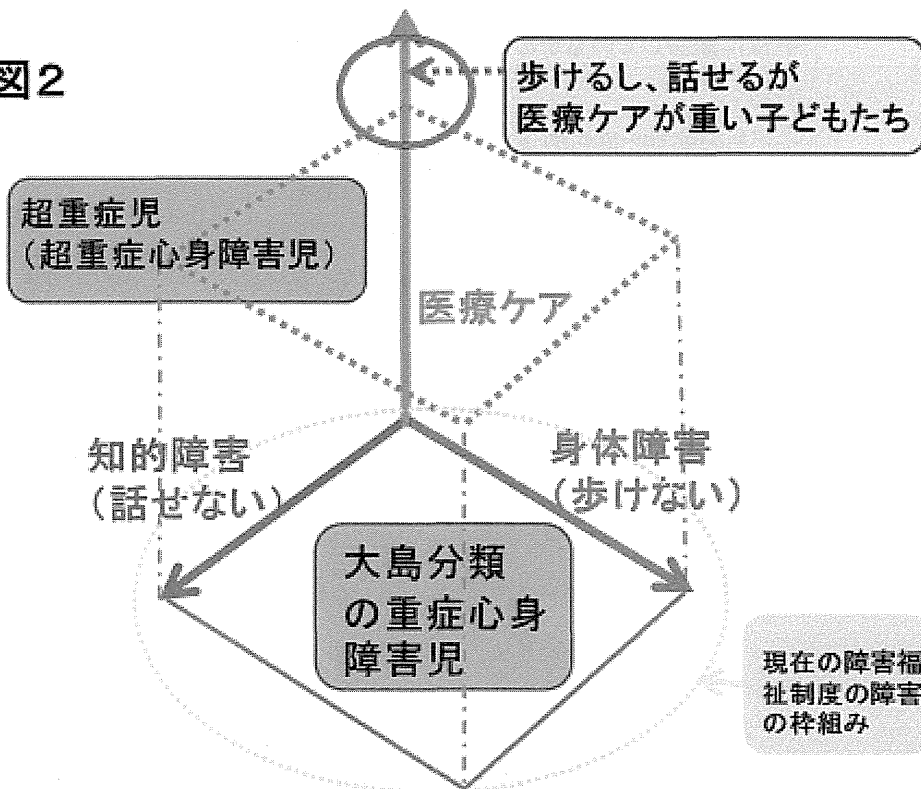


表 1. 多職種合同セミナー研修プログラム

<11月16日土曜日・1日目>

時間		講義	講師
11:45～		受付開始	
12:20～12:30	10分	ガイダンス	前田浩利
12:30～12:40	10分	事前アンケート	
12:40～13:00	20分	小児在宅医療の現状と多職種連携の意義と理念	前田浩利
13:00～13:40	40分	家族看護、家族ケア	奈良間美保
13:40～13:50	10分	休憩	
13:50～14:50	60分	子どもの健康生活	西海真理
14:50～15:00	10分	休憩	
15:00～16:10	70分	小児在宅医療を支える制度 ～0歳から50歳までを支える～	宮田章子・高橋昭彦・ 梶原厚子・戸枝陽基
16:10～16:20	10分	休憩	
16:20～17:30	70分	子どもの病態と育ちの支援1 ①筋緊張が高く思春期になり、二次的な問題が出てき子ども ②体が柔らかく人工呼吸器を装着して普通小学校に通学している子ども	宮田章子・高橋昭彦・ 梶原厚子・戸枝陽基
17:30～17:40	10分	休憩	
17:40～19:25	105分	子どもの病態と育ちの支援2 ③動けるが内部障害があり行動制限のある子ども ④予後不良の染色体異常の子ども ⑤がんの子どもの end of life care	宮田章子・高橋昭彦・ 梶原厚子・戸枝陽基
19:25～19:35	10分	ガイダンス	前田浩利

<11月17日 日曜日・2日目>午前の部

時間		会場と講師			
		第1会場 (ホール) ヘルパー部会	第1会場 (ホール) 看護部会	第2会場 (100会議室) 医師部会	第3会場 (109会議室) リハ部会
9:00 ～ 9:45	45分	楽ちゃん、簡単に在宅を過ごすために (関根まき子)	子どものスキントラブルとスキンケア (作田香織)	NICU 医療の現状 (側島久典)	重症児における健康を維持するための身体の仕組みと運動 ～理学療法からの視点～ (平井孝明)
9:45～ 9:55	10分	休憩			
9:55 ～ 10:40	45分	暮らすために 居宅介護(ホームヘルプ)の実際 (李国本修慈)	訪問看護の仕組み (梶原厚子)	看取りと痛みの緩和 (前田浩利)	重症児の認知、遊び、コミュニケーション (岸本光夫)
10:40～ 10:50	10分	休憩			
10:50 ～ 11:35	45分	つぶれないために ～介護事業所の運営・地域連携マネジメント～ (戸枝陽基)	育ちへの支援 ～子どもたちは何を感じているのかな～ (梶原厚子)	医療デバイス概論と実技① 気管カニューレの交換 (島津智之・高田栄子)	呼吸リハビリテーション (緒方健一、他)
11:35～ 11:45		休憩			
11:45 ～ 12:30	45分	寄り添うために ～相談支援の実際～ (西村幸)		医療デバイス概論と実技②胃ろうボタンの交換 (島津智之・高田栄子)	呼吸リハビリテーション実技(平井孝明、他)
12:30～ 13:25		休憩			
12:40 ～ 13:25	10分	生きるために ～利用者の人生と看取りにヘルパーがどうかかわったか～ (関根まき子)	食べることの育ちを支える ～試食あります～ (西海真理)	急変時の対応 (近藤陽一)	姿勢保持を助ける道具 (中川尚子)

<11月17日 日曜日・2日目> 午後の部

時間		講義	講師
13:25~13:45	20分	レイアウト変更	
13:45~14:30	45分	昼食休憩	
14:30~14:35	5分	お母さんの紹介	恒川幸子
14:35~15:05	30分	ご家族からのお話	在宅生活されているお子さんのお母様
15:05~15:15	10分	質疑応答	
15:15~15:25	10分	休憩	
15:25~15:35	10分	ガイダンス	側島久典・小沢浩
15:35~16:05	30分	退院調整会議のロールプレイ	研究班スタッフ
16:05~16:20	15分	模擬ケース紹介	前田浩利
16:20~17:05	45分	ワークショップ	
17:05~17:15	15分	発表	
17:15~17:30	15分	解説	梶原厚子
17:30~17:40	10分	総括	前田浩利

II.資料編

<資料 1>

全体会議 議事要旨

第1回全体会議

日時	年5月26日 午前10時～午後5時30分
場所	アルカディア市ヶ谷（東京都千代田区九段北4-2-25）
出席	<p><主任研究者></p> <p>前田浩利 医療法人財団千葉健愛会子ども在宅クリニックあおぞら診療所墨田院長</p> <p><分担研究者></p> <p>田村正徳 埼玉医科大学総合医療センター 小児科 教授</p> <p>小沢浩 社会福祉法人日本心身障害児協会島田療育センターはちおうじ 所長</p> <p>吉野浩之 群馬大学大学院 教育学研究科 准教授</p> <p>奈良間美保 名古屋大学大学院 医学系研究科 教授</p> <p>梶原厚子 特定非営利活動法人あおぞらネット</p> <p>西海真理 国立成育医療研究センター 看護部 副看護師長</p> <p><研究協力者></p> <p>宮田章子 みやた小児科 医師</p> <p>恒川幸子 梶原診療所 在宅サポートセンター 医師</p> <p>島津智之 独立行政法人熊本再春荘病院小児科 医師</p> <p>奈須康子 カルガモの家 副施設長</p> <p>井川夏実 医療法人財団千葉健愛会 訪問看護ステーションあおぞら 看護師</p> <p>木暮紀子 国立成育医療研究センター 医療連携・患者支援センター 社会福祉士</p> <p>高橋昭彦 ひばりクリニック 院長</p> <p>李国本修慈 NPO 法人地域生活を考えよーかい 有限会社しえあーど こうのいけ スペース 取締役</p> <p>関根まき子 社会福祉法人すみれ福社会 花の郷 看護師</p> <p>戸枝陽基 社会福祉法人むそう 理事長</p> <p>長島史明 医療法人財団千葉健愛会 あおぞら診療所新松戸</p> <p>緒方健一 医療法人おがた会 おがた小児科・内科医院 院長</p> <p>平井孝明 平井こどもリハビリテーションサービス</p> <p>中川尚子 医療法人財団千葉健愛会 あおぞら診療所新松戸 理学療法士</p> <p>中野弘陽 特定非営利活動法人あおぞらネット 訪問看護ステーションそら</p>

1. 主任研究者あいさつ・本日の会議の方向性・新規メンバー紹介
2. 昨年度のふりかえり
3. 2013年度の方向性とスケジュール
 - ・カリキュラムとテキストの作成
 - ・地域への展開
 - ・全体研修について

4. 各部会での協議

5. 各部会での協議内容の報告と意見交換

<医師部会>

- ・病院医師、成人医師を対象とした研修プログラムを検討。

<看護部会>

- ・昨年度開発した研修コンテンツに基づき、地域性、ニーズを考慮した展開。

<ヘルパー部会>

- ・生活を支えるという役割、相談支援の役割、また医療と福祉の連携について等のコンテンツを検討。

<リハビリ部会>

- ・昨年度のアンケートニーズに基づき、呼吸・関節・障害児との関わり・補装具等について等のコンテンツを検討。

6. 全体討議

7. まとめ

第2回全体会議

日時	2013年7月28日 午前9時～午後5時30分
場所	アルカディア市ヶ谷（東京都千代田区九段北4-2-25）
出席	<p><主任研究者></p> <p>前田浩利 医療法人財団千葉健愛会子ども在宅クリニックあおぞら診療所墨田院長</p> <p><分担研究者></p> <p>田村正徳 埼玉医科大学総合医療センター 小児科 教授</p> <p>小沢浩 社会福祉法人日本心身障害児協会島田療育センターはちおうじ 所長</p> <p>梶原厚子 特定非営利活動法人あおぞらネット</p> <p>西海真理 国立成育医療研究センター 看護部 副看護師長</p> <p>福田裕子 ケアラーズジャパン株式会社 まちのナースステーション八千代 代表</p> <p><研究協力者></p> <p>側島久典 埼玉医科大学総合医療センター 小児科 教授</p> <p>森脇浩一 埼玉医科大学総合医療センター 小児科 准教授</p> <p>宮田章子 みやた小児科 医師</p> <p>田中総一郎 東北大学大学院医学研究科発生・発達医学講座小児病態学分野 准教授</p> <p>島津智之 独立行政法人熊本再春荘病院 小児科 医師</p> <p>井川夏実 医療法人財団千葉健愛会 訪問看護ステーションあおぞら 看護師</p> <p>木暮紀子 国立成育医療研究センター 医療連携・患者支援センター 社会福祉士</p> <p>李国本修慈 NPO 法人地域生活を考えよーかい 有限会社しゅあーど こうのいけ スペース 取締役</p> <p>関根まき子 社会福祉法人ボワ・すみれ福社会 花の郷 看護師</p> <p>戸枝陽基 社会福祉法人むそう 理事長</p> <p>長島史明 医療法人財団千葉健愛会 あおぞら診療所新松戸</p> <p>夏目浩次 社会福祉法人らばるか 理事長</p> <p>平井孝明 平井こどもリハビリテーションサービス</p> <p>中川尚子 医療法人財団千葉健愛会 あおぞら診療所新松戸 理学療法士</p> <p>中野弘陽 特定非営利活動法人あおぞらネット 訪問看護ステーションそら</p>

1. 主任研究者あいさつ・本日の会議の方向性
2. 前回の会議の振り返りと今年度の方向性
3. 各部会での協議
4. 各部会での協議内容の報告と意見交換
5. 最終プロダクトについて
 - ・ テキストの作成
 - ・ 各部会の研修プログラム全体と、各セッションの内容及び到達目標・教材・注意点等を

まとめる

6. 基本ニーズ調査について

7. 多職種合同セミナーについて

- ・ テーマ

小児在宅医療を支える仕組みと技術、多職種連携を学ぶ

- ・ 目的

我が国で初めての小児在宅医療における多職種連携のセミナーの実施。小児の在宅医療を担う人材育成を行う。同時にこの研究班の課題抽出を行うと共に、有効性を追跡調査によって評価する。セミナー、実技講習会の評価法を見出し、実際に適用してみる

- ・ セミナー開催日時・参加者

日程は2013年11月16日、17日。参加者全体で250人程度。各職種50名(+10名)計200名~240名 医師、看護師、リハビリ、介護。オブザーバーとして、教育関係者 相談支援専門員。

- ・ 場所：両国国際ファッションセンター、あおぞら診療所墨田、チャイルドデイケアほわわ

- ・ 参加資格 フル参加が原則

- ・ 共通プログラム

現在の小児在宅医療の現状と多職種連携の意義

小児在宅医療を支える制度—多職種連携の基盤を実際の事例展開を通して学ぶ

0歳から100歳までを支える仕組み

健康な子どもの育ち

小児在宅医療の対象となる子どもの病態と育ち あるべき支援

家庭での医療手技の実際

多職種連携会議を体験する 退院調整会議、ケア担当者会議

患者家族のお話し

多職種連携のシュミレーション

- ・ 各部会の屋台プログラム

各部会で他の部会にも是非これは知って欲しいというコンテンツを出す

8. 来年度以降の展開について

9. 我が国の様々な地域における様々な形の小児在宅医療を支える具体的な連携の在り方、地域づくりを目指す

第3回全体会議

日時	2013年10月20日 午前9時～午後5時30分
場所	アルカディア市ヶ谷（東京都千代田区九段北4-2-25）
出席	<p><主任研究者></p> <p>前田浩利 医療法人財団はるたか会あおぞら診療所新松戸院長</p> <p><分担研究者></p> <p>田村正徳 埼玉医科大学総合医療センター 小児科 教授</p> <p>小沢浩 社会福祉法人日本心身障害児協会島田療育センターはちおうじ 所長</p> <p>奈良間美保 名古屋大学大学院 医学系研究科 教授</p> <p>梶原厚子 NPO 法人あおぞらネット</p> <p>西海真理 国立成育医療研究センター 看護部 副看護師長</p> <p><研究協力者></p> <p>森脇浩一 埼玉医科大学総合医療センター 小児科 准教授</p> <p>宮田章子 みやた小児科 医師</p> <p>島津智之 独立行政法人熊本再春荘病院 小児科 医師</p> <p>井川夏実 医療法人財団千葉健愛会 訪問看護ステーションあおぞら 看護師</p> <p>木暮紀子 国立成育医療研究センター 医療連携・患者支援センター 社会福祉士</p> <p>高橋昭彦 ひばりクリニック 院長</p> <p>李国本修慈 NPO 法人地域生活を考えよーかい 有限会社しえあーど こうのいけ スペース 取締役</p> <p>関根まき子 社会福祉法人ボワ・すみれ福祉会 花の郷 看護師</p> <p>戸枝陽基 社会福祉法人むそう 理事長</p> <p>長島史明 医療法人財団はるたか会 あおぞら診療所新松戸</p> <p>平井孝明 平井子どもリハビリテーションサービス</p> <p>中野弘陽 特定非営利活動法人あおぞらネット 訪問看護ステーションそら</p>

1. 主任研究者あいさつ・本日の会議の方向性
2. 各部会での協議（多職種合同セミナーについての検討）
3. 各部会での協議内容の報告と意見交換

<医師部会>

- ・5つのプログラムを実施。カニューレ交換と胃ろう交換については実技も実施予定。

<看護部会>

- ・4つのプログラムを実施。食についての実技を実施予定。

<ヘルパー部会>

- ・5つのプログラムを実施。座学中心。

<リハビリ部会>

- ・5つのプログラムを実施。呼吸リハについての実技を実施予定。

4. 全体協議

- ・当日の運営について
- ・参加者募集・告知について
- ・アンケートについて
- ・今後のスケジュール確認
- ・事務事項について

5. まとめ

第4回全体会議

日時	2013年11月3日 午前9時～午後6時00分
場所	アルカディア市ヶ谷（東京都千代田区九段北4-2-25）
出席	<p><主任研究者></p> <p>前田浩利 医療法人財団はるたか会あおぞら診療所新松戸院長</p> <p><分担研究者></p> <p>田村正徳 埼玉医科大学総合医療センター 小児科 教授</p> <p>吉野浩之 群馬大学大学院 教育学研究科 准教授</p> <p>奈良間美保 名古屋大学大学院 医学系研究科 教授</p> <p>梶原厚子 特定非営利活動法人あおぞらネット</p> <p>西海真理 国立成育医療研究センター 看護部 副看護師長</p> <p><研究協力者></p> <p>森脇浩一 埼玉医科大学総合医療センター 小児科 准教授</p> <p>宮田章子 みやた小児科 医師</p> <p>恒川幸子 梶原診療所 在宅サポートセンター 医師</p> <p>井川夏実 医療法人財団千葉健愛会 訪問看護ステーションあおぞら 看護師</p> <p>木暮紀子 国立成育医療研究センター 医療連携・患者支援センター 社会福祉士</p> <p>高橋昭彦 ひばりクリニック 院長</p> <p>李国本修慈 NPO 法人地域生活を考えよーかい 有限会社しえあーど こうのいけ スペース 取締役</p> <p>関根まき子 社会福祉法人ボワ・すみれ福祉会 花の郷 看護師</p> <p>戸枝陽基 社会福祉法人むそう 理事長</p> <p>夏目浩次 社会福祉法人らばるか 理事長</p> <p>長島史明 医療法人財団はるたか会 あおぞら診療所新松戸</p> <p>緒方健一 医療法人おがた会 おがた小児科・内科医院 院長</p> <p>平井孝明 平井こどもリハビリテーションサービス</p> <p>中川尚子 医療法人財団はるたか会 あおぞら診療所新松戸 理学療法士</p> <p>中野弘陽 特定非営利活動法人あおぞらネット 訪問看護ステーションそら</p>

1. 主任研究者あいさつ・本日の会議の方向性
2. 多職種合同セミナー実施に関する協議（11月16日、17日実施）
 - ・プログラム内容の確認、プログラム全体の流れ、時間配分、場所の確認
 - ・各部会による研修プログラム内容の確認（内容、物品、時間、流れ等）
 - ・セミナー用のテキスト作成のための確認事項、事前打ち合わせについて
3. まとめ

第5回全体会議

日時	2014年2月2日 午前10時～午後17時30分
場所	アルカディア市ヶ谷（東京都千代田区九段北4-2-25）
出席	<p><主任研究者> 前田浩利 医療法人財団はるたか会あおぞら診療所新松戸院長</p> <p><分担研究者> 田村正徳 埼玉医科大学総合医療センター 小児科 教授 小沢浩 社会福祉法人日本心身障害児協会 島田療育センターはちおうじ 所長 奈良間美保 名古屋大学大学院 医学系研究科 教授 梶原厚子 特定非営利活動法人あおぞらネット 西海真理 国立成育医療研究センター 看護部 副看護師長</p> <p><研究協力者> 森脇浩一 埼玉医科大学総合医療センター 小児科 准教授 宮田章子 みやた小児科 医師 恒川幸子 梶原診療所 在宅サポートセンター 医師 島津智之 独立行政法人熊本再春荘病院小児科 医師 井川夏実 医療法人財団千葉健愛会 訪問看護ステーションあおぞら 看護師 木暮紀子 国立成育医療研究センター 医療連携・患者支援センター 社会福祉士 高橋昭彦 ひばりクリニック 院長 関根まき子 社会福祉法人ボワすみれ福祉会 花の郷 看護師 戸枝陽基 社会福祉法人むそう 理事長 夏目浩次 社会福祉法人らばるか 理事長 長島史明 医療法人財団はるたか会 あおぞら診療所新松戸 平井孝明 平井こどもリハビリテーションサービス 中川尚子 医療法人財団はるたか会 あおぞら診療所新松戸 理学療法士 中野弘陽 特定非営利活動法人あおぞらネット 訪問看護ステーションそら 雨宮馨 社会福祉法人日本心身障害児協会 島田療育センターはちおうじ 医師</p>

1. 主任研究者あいさつ

- ・田村先生より、NICU 退院の現況について説明。病床数も増えているが、呼吸器や気管切開で退院する児が増えている。
- ・宮田先生、小沢先生より、加齢に伴う重症化問題。臨床現場では実感があるが、データがない。気管分離を何歳で施行したか。重症児スコアがどのように変わったか、肺炎の入院回数などの調査が必要。循環器の悪化など。病院に通っていない人もいるので調査しづらい。重心施設をモデル化して行うか。在宅にいる人と重心の人は基礎疾患が違う。重心学会や親の会が調査するとよい。

- ・腎移植、心臓手術の子は調査にひっかからない。腸疾患も。歩ける重症児。呼吸器しているが歩ける多動児などはどこも受け入れない。中途障害も調査が必要。
- ・東京都の人工呼吸器使用者 500 人（フィリップスのデータ）半分は子供。あおぞら 70-80 人、多摩地区 70 人。⇒在宅支援、相談支援の仕組みをどう作るか？多職種連携。人材育成とニーズ調査が土台になる。
- ・小児在宅医療の地域を結ぶソフトを作成する。SONY やテルモなど 3 社の合同プロジェクト。生命の安全では、診療所が病院と地域をつないでいる。健康と社会生活をつなぐのが訪問看護ステーション。

2. 多職種合同セミナーの振り返り（11月16日、17日実施）

3. 各部会よりの総括

・看護部会より

研修プログラムの精錬。同じ職種内でも学びがあった。ネットワークづくりができた。どこまでできるかが見えたが、できていないことも見えた。実際に相談支援の方と関わる時にどうすればよいかわかった。地域で医療と福祉の協働が少しずつできていると実感できている。

・ヘルパー部会より

メンバーも多職種で連携できていた。キーワードは、ご本人さん、共通言語、相談支援、相談支援のマネジメント。自分の視点に広がりをもつことができた。医者は点、多職種は面、それに加えて時間軸が必要。これまでの成長発展を期待する。

・リハ部会より

緩和ケアとして、いい状態を維持していくためにもリハビリが必要。これからやりたいことも考えることができた。技術を生活につなげるには、多職種につなげるには。実際の訪問の現場でも何が必要か考えている。病院の方に要求すべきであると思っている。

・医師部会より

教育、福祉との連携に加えて医師同士もつながった。システムも大切だが利用者さん一人一人に向き合うことが大切。病院と在宅と両方をみながら地域のつながりを作っている。医療だけではなく生活を考え、生活を楽しくするということが考えられるようになった。地域でも少しケアしてくれる医師が増えている。病院自体もノウハウができています。周産期精神保健研究会の活動。継続することがとても大切。小児科開業医の意識も高まっている。ケース会議のやり方も上手になってきた。

・主任研究者前田より

3年間のお礼。今後今回開発したプログラムを様々な形で展開していきたい。

<資料2>

アンケート用紙

- ・ 研修プログラム受講後の参加者の評価アンケート
 - ・ 事前事後アンケート

II 講義に対して、以下4つの質問にお答えください。

1. 各講義内容についてどのような印象をお持ちですか。番号をお書きください。また「非常に不満」とお答えの方は理由をお書きください。

⑤大変有意義だった ④有意義だった ③まあまあだった ②もの足りない ①非常に不満

2. 講義を聞く前と比べて理解度が深まりましたか。番号をお書きください。また「余計わからなくなった」とお答えの方は理由をお書きください。

⑤大変深まった ④深まった ③多少深まった ②かわらない ①余計わからなくなった

3. 講義内容は今後の職務に活かせると感じましたか。番号をお書きください。また、「ほとんど活かさない」とお答えの方は理由をお書きください。

⑤大いに活かせる ④活かせる ③ふつう ②あまり活かさない ①ほとんど活かさない

4. 「講義資料」「講義の説明」「時間数」を含む、上記以外のご意見があればお書きください。

「小児在宅医療の現状と多職種連携の意義と理念」

1. 講義についての印象 () 理由 ()
2. 理解度が深まったか () 理由 ()
3. 職務に活かせるか () 理由 ()
4. ご意見 ()

「家族看護、家族ケア」

1. 講義についての印象 () 理由 ()
2. 理解度が深まったか () 理由 ()
3. 職務に活かせるか () 理由 ()
4. ご意見 ()

「子どもの健康生活」

1. 講義についての印象 () 理由 ()
2. 理解度が深まったか () 理由 ()
3. 職務に活かせるか () 理由 ()
4. ご意見 ()

「小児在宅医療を支える制度～0歳から50歳までを支える～」

1. 講義についての印象 () 理由 ()
2. 理解度が深まったか () 理由 ()
3. 職務に活かせるか () 理由 ()
4. ご意見 ()